

前川ゼミナール

第11回 今年の投資をどう考えるか

前川 貢（前川FP事務所アドバンス代表）略歴
17年間の大和証券勤務のうち、10年を債券のエキスパートとして活躍。独立後は個人の資産形成をサポートする活動を続けている。生活設計塾クルーの提携先でもある。

● 薄れてきた信用不安

昨年春、日銀は「民間部門に資金供給する金融機関の目が曇っているとすれば、日銀は情報を与えて曇りを取っていく」と宣言した。直接中小企業に資金を供給するために、中小企業の持つ売掛債権を担保にした資産担保証券（ABS）を日銀が金融機関から買い取るとし、金融機関には資産担保証券の市場を育成する提案を広く求めた。これにより存在の意義が問われた金融機関の尻に火がつき中小企業向け融資や住宅ローンなどに積極的な姿勢を見せる銀行が現れた。

また公的資金注入で生き返った「りそな」を横目に、他のメガバンクは「りそなにできて何故できない」と指弾を受けまいやう、リストラを進め知恵を絞り新機軸を出し始めた。こうして「もうメガバンクの破綻はないのかな」と信用不安が薄れ、売られすぎた銀行株は買い戻された。さらに、株価では既に破綻状況だった建設・不動産株なども延命期待から上伸、加えて中国の旺盛な建設需要により日本の素材や建機メーカーに特需が入り海運業も復活した。中国の新興富裕層や減税に沸く米国の旺盛な消費需要が住宅・自動車・デジタルカメラ・DVD・プラズマなどの販売好調へとつながり、そしてついには消えて久しかった設備投資にも火が入った。

今年の予想として「現在の景気は米国のがむしゃらな景気浮揚策の減税によるもので効果が切れる春先が山となり、大統領選挙の11月までは持たない」と見る人が多い一方で、

日米とも昨年末の株価を高値だとする人はほとんどいない。「金利は今上げられる状況にない」と日米の中央銀行は宣言しているにもかかわらず、マーケットは金利上昇を懸念している。米国の無茶な財政政策に伴う赤字拡大によりさらなる米ドル安が進み、ユーロや豪ドルは受け皿としてさらに強くなり、金の魅力はさらに増すと予想する人も多い。

● 実績が問われ新陳代謝の年に

投資する機会として、今年はおもしろい。景気に慎重な見方をする人は、「超低金利を背景に大企業はリストラし見かけ上の利益が出るようになったが雇用には結びつかず、依然個人消費は弱い。現在の景気回復は本物とはいえない」と言う。私は思う。もし半年後個人消費に火がついた時、「今から買え」と言うのだろうか。現在の景況は政府が誘導したのではなく、政府を頼らずリストラを行い筋肉質な財務体質を作り消費者ニーズに応えようとする自助努力した企業の成果である。加えて経済に欠かせない金融システムに対する信頼が戻り年後半に設備投資に久々の火が入ったのは、今後の景気を見る上で心強い。

今年はいよいよ面でも実績が問われる年になるだろう。例えば金融機関。今まではすべてが「急に実績を問われても困る」という状態だったが、現在は成果を上げているところが出てきた。「この1年間どんな手を打ってきたのか」と企業の展望を確認する株主の眼は厳しくなるだろう。こうした厳しい目に応じて実績

を上げる「勝ち組」と冴えない「負け組」が二極化し、活気ある勝ち組にならえと新規参入の企業が現れる。そんな新陳代謝が今年起きるのではないかと予想している。

● 期待収益数%が基準に

このような期待感には株価にはプラス要因だが、昨年のように売られすぎの反動に伴う「何を買っても儲かる」相場ではなく、より企業を選ぶ眼が求められる。期待が先行するため、株価が大きく上下する場面も覚悟しなければならない。こうした手入れに自信のない人は、とりあえず実績のある株式投信に委ねるのも良いだろう。

また現在強いユーロや金も一本調子に強くなることはありえず、ヒヤッとする場面もあるだろう。分散投資で考える場合は弱くなった時に買える余力を残しておくことを勧めたい。株価の値動きにドキドキしたくないという方にとっては、今年は外債投資のチャンスである。株価が上昇する局面は、金利が上昇することが多い。特に日本株が上昇する場面では同時に円高が進む傾向があるため、円高時に金利の高い外債を手に入れる機会として注目したい。米ドル建て・ユーロ建てで5%、豪ドル建てで7%以上あれば、まずよしというところか。外債の5~7%の利息を楽しみながら、株式投資で利益が出ると確信した時だけ参戦する。投資は儲けようと市場に賭けると苦しくなり、下がれば買いたいと眺めれば楽になる。予想外の展開は必ずある。今年はおもしろい。